

長崎平和文化研究所 都市の記憶VI 講演の記録

イエズス会本部と長崎 —長崎開港 450 年を振りかえって—

デ・ルカ・レンゾ神父

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

イエズス会本部と長崎 ―長崎開港 450 年を振りかえって―

デ・ルカ・レンゾ神父

Web 講演

会場：長崎市立図書館 多目的ホール

2021 年 1 月 10 日

上菌：どうぞよろしくお願いいたします。会場を見ると少ない人数ですけれども、実際には 70 名ほどの方にご参加いただいています。雪を考え、COVID-19 を考えると、こういう形にしてよかったなという気がします。

今日のお話、とても楽しみにしています。というのは、レンゾ神父がローマから取り寄せられた非常にオリジナリティの高い文書を使って、長崎のいわゆる岬の教会が当時どういう状況だったのかを、お話していただけます。

さっそくレンゾ神父、よろしくお願いいたします。

レンゾ神父：はい、よろしくお願いいたします。私も長崎に行って話したかったんですが、まあこういう状況ですから、多少の不便はあるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。皆さんちゃんと画面が見られるようになっているでしょうか。OK。

今日話す三分の一くらいは、去年の発表ならびに後で本にした資料に重なるかもしれませんが。最初はそれを外そうと思ったんですが、今日だけ参加する人もあると考えて、話します。去年参加された方には、ご了解をお願いします。

長崎の港は開港して 450 年がたっていますが、当時のヨーロッパの人たちから見ると、ヤーパンは世界の端っこですね、世界地図から落ちてしまいそうな。

オルテリウス「大地の舞台」世界図 1570 年、を見ると、大西洋を中心に世界が描かれ、日本は東の端の島として描かれています。

今回の新しい資料です、教皇に報告しているいくつかの箇所、人身売買とか奴隷問題が報告されており、これを無視する訳にはいかないと思います。マカオー長崎の港の関係もあります。

1568年の段階、長崎開港の前ですが、すでに教区に、リベラ神父が、彼はイエズス会員ではないんですけれども、書いています。(スペイン語を)日本語に訳すと：

[その修道士は]神と王に反する、躓きとなる新しい意見に拘わっていました。それは、マラッカで支払われている品物に対して、ここからインドに渡るポルトガル船の税金を、不正に隠してもいい、また[脱税した分を]返さなくてもいいという考えでした。同じ考えから、ポルトガル人が買って密輸する中国人奴隷と日本人奴隷について、これに対して天と地に向かって叫ぶ神法と人法、またすべての教会博士、特にドミンゴ・デ・ソトとマルチン・レデスマ師たち[に反して奴隷制度を正当化しようとしてしました]。(中国・日本人奴隷と拉致についての報告、ピウス5世教皇宛 リベラ神父書簡 Macau 1568年10月 Jap.Sin 06 f.238)

これを見ると、マカオで中国人と日本人の奴隷、とありますから、すでに奴隷問題が出てきており、教区に報告されています。ですから、長崎も結局これに拘わっていることとなります。後でもう少し紹介します。

1580年にヴァリニャーノ神父が巡察士として出した「Regimiento para el Superior De Japon」Valignano 1580, JapSin. 8 I f.266v, 日本に来ていた当時の宣教師たちの考え、長崎の港についての考えの議論に入ります。これはスペイン語です。

キリシタンたちと神父たちの役、及びその保全のために、ポルトガルの船が通常行く長崎の港が十分に強化されており、弾薬、武器、大砲、その他の必要なものが備えられることは非常に重要である。同様に、茂木の要塞が安全に備えられることが重要である。茂木は、大村と高来の通路であり、私たちがそれらの地方でキリスト教の勢力を保つべきだからである。これらの二箇所が私たちの責任下であり、非常に重要であるため、これらが十分に提供されているよう、上司が細心の注意と勤勉さを持つ必要がある。そのために、この最初の年[1580]に上司たちは強化に全ての必要なものを費やし、どんな敵であろうとも守れるように[すべきである]。そして毎年、上司は150ドゥカット[150石]を費やしてポルトガル船から弾薬、砲兵や最も必要なものを備え、さらに強化し、供給し続けるべきである。[略]長崎をより安全でより強くするために、そこに住む結婚した[定住する]ポルトガル人皆に要塞が完成すれば、その内側に移動し、あらゆる危険から守られるようにすべきである。そして、その場所の住民と人々を拡大して増殖させ、住民の資質と力に応じて防備の武器を与えよう。

つまり長崎と茂木の2か所が責任下であり、すでに1580年の大村純忠からの譲り状がある2つの町が重要であり、十分に安全が提供されるよう、上司が、当時の管区長です、まだ決まっていなくても巡察士などです、細心の注意を払う任務がある、と言っています。最初の都市、これはもちろんヴァリニャーノ(巡察師)にとっての最初の土地ですけれども、上司たちがすべての必要なものを費やし、どんな敵であろうとも守れるようにすべきである、つまり、長崎の安全を神父たちが守るべきだという意識があるんですね。その中で、

150 ドウカッド，これは単純に1ドウカッド=1石としました。これにはいろいろ議論があるかもしれませんが，時代によって変わりますけれども，単純に言えば150石を費やしてポルトガル船から弾薬などを手に入れるべきだ，という考えを語っています。

さらに，長崎をより安全でより強くするために，要塞が完成すれば，ここに住む結婚した，つまり安定している定住している，ポルトガル人は皆その内に入る，と考えています。まさにマカオとか他の当時のポルトガルの街と同じようにして，住人たちが守られる，ギブアンドテイクという形を計画しています。

これは去年紹介しましたが，1585年，先ほどの資料から5年経って，元県庁があったところにあるイエズス会本部の教会が，すでに2度も3度も増築された，と書いてあります。

長崎の教会は，過る年，来訪者がいよいよふえてきたので，すでに二度も三度も増築された。教会はかなりの収容力があるにもかかわらず，それでも来訪者の数が〔あまりにも〕大勢で，二割ないしそれ以上の者が，日曜日や祝祭日には屋外にはみ出して，陽光に曝され雨に打たれる有様であった。早朝〔教会の〕扉が聞かれると，人々は我先にと場所をとろうと重なり合って殺到した。そこで，いまだかつて日本で建てられたことがないほど巨大で荘重な一教会をこの地に建てることが決められた。そのためには約二千クルザードの喜捨が寄せられた。(フロイス『日本史』11, p.13)

教会は，非常に大きかった，入る人数が多かったにもかかわらず，日曜日あるいはお祝いの日には外に人があふれて太陽や雨に打たれる。そこで，最後のところですね，いまだかつて日本で建てられたことのないほど巨大で荘厳な教会を建てることにしたんですね。

同じように2000クルザードだから先程の150石を超える金額の寄付が，外国と日本の大村などから寄せられた。そのぐらいのお金をかけて装飾しています。つまり，この教会が永遠に続くかのような感覚で，宣教師たちあるいはそこに住む日本人やポルトガル人たちを抱え込んでいたことが，明らかです。

また，同じ資料になるんですけども，加津佐から長官（この場合はフロイス）が書いていますが，1589年の段階でヴァリニャーノだけじゃなくてフロイスも，極端ともいえる考えを抱いています。

イエズス会また教会が日本で保たれるために，迫害が起こったら神父たちを匿まう要塞や基地が欠かせません。また，そこに持ち物，服と食料を保管できる場所が必要です。…

それにフェリペ王によって200人また300人の兵士を付け加える必要があります。…

独裁者が有馬のドン・サンチョと大村のドン・サンチョの領地を奪って[やろうと思えば命令一つで実現可能]，天草殿を殺せば，日本に残る場所が一つもなくなります。

イエズス会は，教会（キリシタンたち）が日本で保たれるためには，迫害が起こったら神父たちをかくまう要塞や基地が欠かせません，とフロイスが総長に宛てて書いています。また，

そこに持ち物や服など安全に保管できる場所が必要です、と。当時のスペインの王様フェリペ王によって、200人、300人の兵士を付け加える必要があります、と。こんなに多くの兵士派遣はもちろん不可能ですけれども。フロイスが何を考えたかわからないけど、本人としてはスペインから200人、300人の兵士を派遣してもらうことが可能だ、と思ったんですね。

独裁者（豊臣秀吉）が有馬のドン・サンチョ、つまり有馬義明の領地を奪うことは、やろうと思えばいつでもできる、フロイスは事情が分かっていたから、秀吉に勝てる大名がいらないんだ、と。天草とか大村はすぐに取りられかねない、と。だから、兵士が必要だと提案しているんですね。

このようにして、話がますますエスカレートしていきます。

彼〔大村殿〕は書面で後述の方法で寄付をした。ポルトガル人から大きな満足を得ながら、私〔ヴァリニャーノ〕はイエズス会を代表してその寄進状を受けた。そして、1580年から1587年まで、神父たちはポルトガル人から、商船の荷物全体の価値から、1日にまとめて支払った700デュカート〔700石〕を受けとっていた。それとは別に我等の関与なしに〔大村氏の〕大臣から、日本人が購入した税金を徴収した〔分を〕、収集した。そして、その〔長崎〕港の管理のため、神父たちはドン・バルトロメ承諾の上、裁判官を任命した。当地の慣習に従って個人的な問題の相談のために村人だけが神父たちの所に来ていた。

その港には、日本全国の商人がポルトガル人から商品を買いに来たので、当時そこに住んでいたポルトガル人は、品物を保管していた。戦争が続いており、海の泥棒が多かったので、彼らは危険にさらされていた。その町の人々はドン・バルトロメの命令と父親の助言に基づいて、岬に続く土地の部分にいくつかの土塁を作るように決定した。そこに兵士を備えて海の泥棒から免れるように。その町には、村人による要塞や警備員しかなかった。（〔国の〕副総督がドン・バルトロメに送呈した弾薬や補給品は展示品の役割しか果たさなかった。これが長崎の港町である。（1598年 Apologia c.13 ff.74-76）

3行目、1580年から1587年まで、神父たちはポルトガル人からの商船の荷物全体の価値から、一日まとめて支払った700ドゥカッド、相当な金額を受け取っていた。それとは別に、教会が関与することなく、大村氏の大臣が日本人から集めた税金を、教会は受け取っていた。すると、日本全体の貿易の中心として長崎があって、長崎はそこから膨大な利益を受けていたことになります。これを見ると、オランダ人が入って出島ができてからではなくて、前からそうだったことになる。管理のために神父たちは、ドン・バルトロメ大村純忠の承諾のもと、裁判官を任命しています。裁判官はヴァリニャーノなりの表現ですね。当時の習慣に従って個人的な問題の相談のために、村人たちが神父たちのところに来ていた、と。国際交流が盛んだった様子がうかがえます。

長崎の港には、日本全体の商人がポルトガルの商品を買いに来ており、当時そこに住んで

いたポルトガル人が品物を保管していた。日本国内では、戦争が続いていた、海は泥棒が多かった、海賊といいましょうか。教会は危険にさらされているんだ、と。つまり、長崎にはいろんな品物、宝物があるから、盗みに行ったり、攻めて品物を取ろうというようなことがあるんですね。ですから、土塁とか要塞を作るように決めた、ということです。1580年代から、そういう動きがあり、警備員を入れる必要があったんですね。

これはヴァリニャーノが書いたもの、「Apologia」、弁駁論と訳していいんですけども、自分たちイエズス会を弁明する立場の文書ですから、イエズス会を味方にするための偏った立場を強調する資料です。

[f.83] 商売、またそのすべての出来事について、ポルトガル人との問題が発生するとき、日本人はいつも神父達を探すので、同じ家〔イエズス会本部〕に出入りする両方の人数が多いことは事実である。しかし、日本人たちは長崎に[相談できる]人がいなくて、神父達に対するこの信頼と評判があるが故に忠告を得ようとして来るとすれば、私たちに別の行動[断ること]ができようか (Valignano, “Apologia” p.197)

1580年ですけども、その前からの時期を説明しています。アポロジアの中で、商売、またすべての出来事について、ポルトガル人と問題が生じるときには、日本人はいつも神父たちを探すので、イエズス会本部に出入りする人数が多かったことは事実である、と。

商売の家じゃないかとの訴えがあったんですね。神父たちに対する信頼が、修道ではなくて、相談する人がいないから商売の家になっていると。そのような訴えに対して弁明している文書です。日本人たちは、長崎に相談できる人がおらず、神父たちに対する信頼と評価があるがゆえに、忠告を得ようとして来るのであって、だとすれば私たちは断ることができない、仕方がないんだ、と。もちろん大きな相談は、値段ですね。互いに値切ったり、これはヨーロッパではそんなに価値があるのですかとか、ポルトガル人は、日本ではそれはそんなに高いのですかとか、そういう場面が覗われます。

1590年になると、このままだと困ると、商売に振り回されている、と宣教師たちがみんな加津佐に集まります。すでに秀吉の禁教令が下りているなかです。

加津佐で1590年に開かれた「日本イエズス会第二回総協議会」を受けての決定

[介入しない] 第二の理由、領主やキリスト教徒が自己の問題についても助言を求めに赴くべき高位聖職者が現在当地におらず、かかる戦争に際してこの種の助言や援助を我々にしばしば要請するので、これを解決し得るのは至難である。…特にこの種の戦争では一切を灰燼と化すのが日本の慣習である。(『キリシタン研究』一六輯 p.211の翻訳による)

そこでは、方向転換、戦争などに介入しない、あるいは商売に介入しない、第二の理由が領主やキリスト教徒が自分の問題について助言を求めに赴くべき聖職者が現在当地におらず、つまり司教がいないことを指しているんですが、かかる戦争に対して、互いの助言、援助を

われわれにしばしば要求するので、これを解決するのは困難である、と。特にこの種類の戦争では、つまり日本の戦争に外国の人が関わっても収拾できない、事情の分かる形にはならないから、適切な助言にならない、ということです。

この内容は、先のヴァリニャーノの弁駁論とまったく違う内容です。2, 3年で状況がまったく変わり、考え方が変わった。

以下は、ヴァリニャーノが総長に宛てている書簡です。さっきのアポロジアのように弁明する形ではなく、個人的な肩書上 1592 年 2 月の段階でこう書いています。

〔関白は〕礼儀正しくて丁寧な書簡によって、我らの仲間が長崎の教会と修道院に残るように命令しました。それは総督との商売の仲介者になるためでした。

関白秀吉は、礼儀正しく丁寧な書簡によって、われらの仲間が長崎の教会と修道院に残るように命令した、と。それは総督、マカオとフィリピンとの商売の仲介者になるためでした。ヴァリニャーノの見方では、宣教師たちがそこに残るように要請された理由は、やはり商売の仲介のため、そして通訳、両方の文化がわかる人がいないと商売できない、と見通したようですね。

1592 年ですけれども、同じ *sumario*、「日本巡察記」の中でこの資料が出てくる。関白の人質になるんですね、当時、商売のために残ったとは、総長に対する報告としてヴァリニャーノの解釈で、人質です。当時関白秀吉が、住人の神父を人質として長崎に残すように命令した。住人が選んだわけじゃなく、人質ですね、何かあればその人たちに責任を取らせますと。あるいは逆に言うと、変なことをすればその人たちが殺されるという、商売の要素とはまったく違った、軍事的な、政策的な面が入っている。さっきの話と違ってきています。

教会とイエズス会の状況を説明します。最初に、関白殿が長崎港を没収したこと以外、ドン・バルトロメウ大村殿の領地に関して、「要録」が書かれたときから何の変更もありませんでした。港以外の領地はドン・サンチョ（ドン・バルトロメウの息子）に残し、長崎港とその町全体が関白殿のものになったが、今のところ、キリシタンに関して変化はありません。ただし、関白が長崎に派遣する人物を見て心配や不安が高まってきました。長崎に神父たちが居ないとこの町とその商売が成り立たなくなることを知った上、我らに対して知らないふりしてきた。関白が、これから総督に送る贈物の返事が来るまでに 10 人の神父を人質として長崎に残すように命令したので、今からもこの状況が続くでしょう。これによって、港に依然として修道院が現存し、人数も建物も前よりはるかに拡大しました。「要録」で建設が始まったと報告した教会も完成し、その神父会館も拡張できました。周囲の村にも修道院三棟が建てられました。（ヴァリニャーノ 『日本要録補遺』 Jap.Sin. 49 f.390v より）

ヴァリニャーノは、要録、つまり巡察記と日本語で訳されているこの *sumario* で語っています。私たちがそこに捕らえられて、10 人の神父が命がけでイエズス会本部にいて、依然

として修道院がある。しかしその 10 人は保証人、人質ですね。他の神父たちやクリスチャンたちについては保留、その段階では何もしない、そういう解釈ですね。

同じく総長に書いているヴァリニャーノのもう一つの手紙を見ますと、1599 年ですね、さっきの手紙の 5, 6 年後になるんですけども、次のような要素が加わる。秀吉が亡くなったとはいえ、長崎の代官つまり寺沢殿がわれらのことを不満に思っていたので、私たちと協力者の大部分は、とともに長崎から離れることにした、と。決定したのはヴァリニャーノたちですね。それを見てセルケイラ司教は（もうこの時は長崎に司教がいました）、務めのために日本語が大事だと思って、われらとともに移動することにしました、と。（省略したところは、セルケイラも日本語を勉強していた、という所です。）

〔秀吉が亡くなったとは言え〕長崎の代官寺沢殿が我らのことに不満に思っていたので、私たちと協力者の大部分と共に長崎から離れることを決定しました。それを見たセルケイラ司教も勤めのために日本語が大事だと思って我らと共に移動することにしました。…アウグスティン津守殿〔小西行長〕の領土である天草を選びました。…

我らと共に神父、修道士、同宿たちも異動したので、長崎の修道院が空きに近い状態になりました。天草に移ったのは会員 16 人、ドン・ルイス司教と 30 人余りの同宿でした。

そこで、アウグスティヌス小西行長の領土である天草を選びました、と。つまり彼らをかかまって守ってくれる場所を探して、長崎ではなくて天草、小西行長のもとに行った。もちろん、おそらく殿たちと相談して決めたと思いますが、われらとともに神父、修道士、同宿たちも移動したので、長崎の修道院が空きに近い状態になった、と。天草に移ったのは、会員 16 人、ドン・ルイス、つまりルイス・セルケイラ司教と 30 人余りの同宿。つまり、寺沢殿の言葉からして、長崎は安全ではなくなったという判断で、追い出される、あるいは殺される前に、天草に移動することになった。この文書を見ると、10 人だけが保証人として残るのは、計算したうえでの動きだったのでしょう。

最初に紹介した奴隷の話です。秀吉は韓国に 2 回出兵しています。その中で高麗ですね、出兵によってたくさんの朝鮮半島の人たちが連れてこられた。パシオ神父がこの人たちを高く評価している、おそらく当時の長崎人に対する評価だと思うんですけども、この人たちは思慮深くて、われらの聖なる信仰を受け入れる能力の高い人々であると評価しています。ですからこの人たちを、同じ扱いにすると、公教要理をよく学び、勉強に熱心だと認識しています。

九州の朝鮮人についてパシオ神父書簡

Jap.Sin. 45 I, 196 (Pasio, 1594 年 10 月 20 日)

この（九州）地方に、戦争〔秀吉の韓国出兵〕によって日本人に捕虜された数多くの朝

鮮人がいました。朝鮮人は、思慮深く、我らの聖なる信仰を受け入れる能力の高い人々であるので、準管区長は彼らの言葉（それは中国人と同じで、また日本でも使われる言葉である）を読み書きのできる人々を捜すようにしました。この人々は日本語を学んだ後、公教要理をよく学んで、彼らの言葉でその要理の要約と祈りを書きました。これによって朝鮮人に教えやすくなり、今年は2,000人ほどが洗礼を受けるほど多くの実が得られました。朝鮮人は、一般的によく理解でき、キリスト教について好んで聞く人々であり、それに対する難解や疑問を提示します。朝鮮人の要理に参加する日本人が驚いて、「聖なる信仰に関して日本人にちっとも劣らない」と言わせるほど彼らは我らの教えに対する問答に理解を示しています。

もちろん拉致され連行された人たちですから、できれば日本にはいたくないでしょうけれども、長崎にいる以上、勉強するんですね。この年、1594年ですね、2,000人ほどの朝鮮半島の人が洗礼を受けたということです。後になると、サン・ロレンソ教会ができて、今でいえば日韓の共同体ができていたということです。

このレデンシアス、もう一つヴァリニャーノが書いた書物ですけども、これが日本にいる人たちのための指示というか、命令というか、方針、を残しています。

管区長であっても誰も、直接や間接的[例えば神父たちがその土地を奪うと話す]暴力を通して脅迫することを堅く禁ずる。キリシタン武士に、戦争するように、戦争をやめるように、または同盟した武士に対して、反逆するように、同盟を離脱することなど、相手はキリシタンであってもそうでなくても、そのような働きかけを厳禁する。このような事柄に関して、力や暴力によって働きかけるべきではないからである。

2、同じように、イエズス会が要塞、武器、砲弾と、そのような物を引き受けてはならない。それはイエズス会用であっても、他人のためであっても厳禁する。

1592年になると、先の80年代と全然違って、こういう風に書いています。

管区長（これは長崎のこと）であっても、誰も直接や間接、例えば神父たちがその土地を奪うというような話をするような、暴力を通して脅迫することを固く禁ずる。キリシタンの武士に対して、戦争するように、または戦争をやめるように、また、同盟した武士に対して、反逆するように、同盟を離脱するなど、相手がキリシタンであってもそうでなくても、そのような働きかけをすることを禁ずる、厳禁する、と。このような事柄に関して、力や武力によって働きかけるべきではないからである、と。

同じようにイエズス会は、要塞とか武器弾薬を引き受けてはならない、と。それはイエズス会用であっても、他の人のためであっても厳禁する。徹底して、今までの感覚とは違うのだ、と。先の80年代、土塁を作って兵士を送ってもらおうと考えた時と全然違うんですね。ある意味では目覚めたといひましょうか、長崎を軍事力では守れない状況だと。

状況に巻き込まれるんですね。出兵とか侵略、秀吉の時代に2回多くの人たちが捕虜として連れてこられたけれども、当然ながら日本、特に長崎に住んで、彼らをどう扱えばいいか。

この問題に二人の司教がかかわります。マルティンス司教、日本に来てすぐに亡くなるんですが、日本の召使い制度、*servicio* の表現を使うんですね。スペイン語で *escravos* 奴隷とまた違うんですね。エスクラボスよりは、はるかにゆるいというか、手伝ってもらう、といっても自由化したい今の私たちが考える雇い人ではないんです。けども奴隷とは違う。そういう表現を使いながら、奴隷状態に近いという趣旨が出ているんですね。人身売買、日本少年少女の拉致に対する、司教の権限ですね。司教にしか解消できない。召使いは、大きな問題として認識されていました。

1598 年ごろになると、セルケイラも、マルティンス司教に代わって来た司教ですが、やはり長崎で破門宣言を決定して、いろいろ相談したうえで日本と韓国の召使制度、これを禁止にするんですね。ですから、平等に扱っています。日本にも朝鮮半島にも奴隷制度、人身売買制度があったんですね。韓国から連れてこられただけじゃなくて、日本人も連れていかれたり、そういう状態だった。ですからキリシタンとしては、禁止する。もちろん、これがどこまで守られたかは別な問題ですけども。

教会が、これに対して宣言あるいは決定しなければいけないほどの問題だった、当然ながらこれは長崎の港で行われていた、長崎だからじゃないでしょうけれども、結果としては長崎が日本全体の代表として、その社会問題に巻き込まれる、あるいは解決しようとする大きな影響力をもったんですね。つまり、長崎に出入りしていたマカオ、フィリピン、インド、ヨーロッパからの船、そこに乗っていた人たちのことを決めるような、そこに影響するような流れになります。

マカオよりジュアン・アルヴァレス神父宛て 1602 年 1 月

25 日付スピノラ神父書簡。

今年は朝鮮半島から捕虜として来られた人々を帰国させる計画があったため、何人の大使が来日した。それを受け、私は向こうに渡って〔日本で〕キリシタンになった人々の信仰を支え、そちら〔朝鮮半島〕で宣教するために準管区長に立候補した。

準管区長は顧問達と相談して私に許可を与えた。しかし、あまりにも大事な障害があり、実現できなくて私は日本に残った。

さっきの話より少し後のことですけども、1602 年のジュアン・アルヴァレス宛てにスピノラ神父（迫害され、鈴田の牢で殉教者になるんですけども）の書簡、面白い資料ですね。今年は朝鮮半島から捕虜としてこられた人々を帰国させる計画があり、そのために何人かの大使が来ました、と。つまり韓国から大使たちが来て、どうするかという話ですね。それを受け、私、つまりスピノラは、向こうすなわち韓国に渡って、日本でクリスチャンになった人々の信仰を支え、朝鮮半島で宣教するために、管区長に立候補した、ということです。結果としてスピノラは日本で亡くなる、ということは、このプロジェクトはうまくいかなかったことになりますけれども。

準管区長が顧問たちと相談して相談して、私に許可を与えた、しかしあまりにも重大な支

障があり、実現できなくて私は日本に残った、と。

連れてこられた人たち、拉致されていた人たちの問題に教会全体がかかわって、長崎はある意味、現代風に言えば社会問題に積極的に関わって、スピノラたちを送って、向こうでその信仰が保たれるような計画をたてたと。うまくいかなかったけれども。そういう配慮が、長崎で、港だから、できたということになります。

なぜヴァリニャーノたちがそんなに変わったかを取り上げます。背後に、この時代のイエズス会の総会議がある。イエズス会総会は、例えば総長が亡くなると人々が集まって総長を選ぶ、世界の会員たちが集まるので、その時いろいろな問題、世界的な問題にかかわる事を話し合います。

イエズス会第5総会議教令

Fifth General Congregation of the Society of Jesus (1593-1594)

["For Matters of Greater Moment", p.201]

従って、誘導や欺瞞があってもまた、どんな要請や誘惑によっても、どんな理由であろうとも、総会議はこの教令をもって荘厳かつ厳格に、会員達がこのような公の出来事に関わることを禁じる。

1593年から1594年にわたって行われた総会で、「誘導や欺瞞があっても、どんな要請や誘惑によっても、どんな理由であろうとも、総会議はこの教令をもって荘厳かつ厳格に、会員たちがこのような公の出来事に関わることを禁じる」と決めた。これに関わる世界的な動きのタイミングを見ると、ヴァリニャーノたちの動きを受けて決めたように受け取れる。ヴァリニャーノたちが変わったというよりは、ヴァリニャーノたちの長崎でのやり方があまりにも強引だったということで、世界の会員たちが総会議教令によってこれを否定した、そういうタイミングですね。世界中の修道士、これはイエズス会だけではないけども、この場合、長崎にかかわったのは多くイエズス会の会員でしたから、この動きを通して総会議教令が出されたということですね。

これはもちろん軍事的なことには関係なく、もう少し社会的、経営的などところに関わる。この面は今まで注目されていなかったから、あえてこの所を紹介しました。

教皇から送られてきた通知として、こういう資料があります。

1610年の書簡に添付された教皇による定め

「修道士も聖職者も利益を目的に商売をしてはならない。」

修道士も聖職者も、聖職者は修道会出身だけではないんですけれども。とにかく聖職者も、利益を目的に商売をしてはならないということです。もう1610年ですね、一気に10年間の間に変わっていく。ヴァリニャーノたちの、修道院にたくさんの人が商売のために来てしょうがないという理由、それは許さないと、教皇からの書簡にある。もう少し総合的な資料があったはずなんですけど、イエズス会の文書館に残っている文書には、教皇によってこういう

定めが出ている、と残されています。これはラテン語です。

ある意味ヴァリニャーノ達は調子に乗りすぎたということですね、平たく言えばそういうことだと思います。それに、大きなブレーキがかかった。

つまり、徳川政権が迫害の手を広げただけではなく、世界の動きとしてこういう方針の変化があった。逆に言うと、その方向転換の要因になったのは長崎の本部だった、と言っていると思います。

Pasio, “Obediencias” 1612 (Ajuda 49 IV 56 147v-148 より)

5. 我等の神父たちが日本の戦争について知識がないのでそれに関する忠告ができない。経験を基にすれば殆どの場合間違った忠告する。…従って公にも秘密にも会員が管区長と相談しない限りこの事柄についての意見や忠告を厳禁する。…

第5総会がこれを禁じるので、管区長はクラウディオ（総長）神父がヴァリニャーノ神父宛に書いたことを厳守すべきである。

これが文書館にある資料です、1612年です、先の **Obediencias**, 最初ヴァリニャーノが書いたところに、パシオ神父が、この段階でヴァリニャーノ神父は亡くなっていたんですが、足して修正したりした資料になるんですけども、この5番目ですね、戦争について書いています。つまり、ヴァリニャーノ神父たちが日本の戦争について知識がないので、それに関与する忠告はできないと、ある意味で戒めているんですね。経験をもとにすれば、ほとんどの場合は間違った忠告をする、と。つまり反省めいたところからすると、ヴァリニャーノ批判だとは書いていないんですけども、内容的にはそういうことを言っています。公にも秘密にも、会員が管区長と相談しない限り、この事柄つまり戦争について意見や忠告を禁じる、と。さっき紹介した代表の総会を敢えて引用しています。パシオが。総会がこれを禁止するので、管区長、つまり日本の管区長はクラウディオ総長ですね、その段階ではもう亡くなっているんですけども、クラウディオ総長がヴァリニャーノ神父宛てに書いたことを厳守すべきであると。これを見ると、当時の宣教師たちは把握していなかったけれども、総長とヴァリニャーノの間には、非常に細かく、これは止めなさいといったような話があった。紹介したのはその2、3枚に過ぎないですけども。

このような制限が必要だ、そうしないと迫害されるというか、完全に追い出されるきっかけを与えるという認識ですね。

もう一つ資料を紹介します、またヴァリニャーノの手紙になるんですけども。

しかし、私たちは長い会議を長崎で開いて、その上で管区会議を開催し、ローマにいるかのような信頼と神においての安らぎをもって、ジル・デ・ラ・マタ神父を代表として選ぶことが出来ました。

今年は絹が売れていないし、2月15日になった今日までも、普段〔長崎に〕来る都と堺の商人たちが来ていません。

「私たちは長い会議を長崎で開いて、そのうえで管区長会議を開催し（これはさっき紹介した加津佐での会議ですね）、ローマにいるかのような信頼と神における安らぎをもって、ジル・デ・ラ・マタ神父を代表として選ぶことができた」と。つまり、こういう日本の問題を総長や総会議に知らせたのは誰かという、このジル・デ・ラ・マタ神父です。日本にいる宣教師達の代表が会議に参加したんですね、そしてジル・デ・ラ・マタが、さっき紹介した今までの問題を話した。あまり資料に載っていないことも、たぶん自分の経験として話した。ですから、こういうような状況が総会議に影響を与えたといっても大袈裟ではない、と。つまり今までの状況を、人からも聞くことができたんだと。

あとは、下に書いているんですけども、今年は絹があまり売れていないし、2月15日になった今も、つまりもうすでに船が来る時ですね、普段は長崎に来る都と堺の商人たちが来ていません、と言っています。どれだけ依存していたか、商売などにかかわっていたかを示しています。さっきの資料と並べてこれを見ると、やはり大きな問題になっていたんだと。もちろんお金が必要、そうしないと建物などができないんですが、そのやり方がまずいんだという反省ですね。

もう一つ資料を紹介します。

私はいまだに憶えているが1597年太閤様が朝鮮に戦いをしかけたとき、朝鮮人、ことに女性の捕虜が多数日本に連れて来られた。それとともに日本のとはまったく異なった銅や真鍮の器、着物などの掠奪品がたくさん運ばれて来た。この市のある店に八パルモ平方の紙をとじた本が何冊か売りに出されており、私はその中の二冊を買った。…

この頃、私は五人の朝鮮人の娘を下女〔奴隷〕として使っていたが、その中の三人は日本語が達者だった。私が彼女らと呼ぶと二人は笑って互いに顔を見あわせ、マリアという名の一番小さい娘を呼び、三人でそれらの画の意味について論じ始めた。終りに彼女らは、それは自分たちの国で崇めている聖人たちの本で、自分らの教えとあなたがたの教えとはほとんど一つなのだから、あの三人は神である、それからあの婦人はすべての聖人たちにもまして崇められている方だといひ、その他にも私が感嘆するほどのことをのべた。（アビラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較 岩波書店 1965年 p.322-23より）

これがアビラ・ヒロン、宣教師と同じように迫害されることはなかったんですが、非常にタイミングとしていいことに、彼が1614年に禁教令を見て、いろんな異国を紹介するんですけども。朝鮮半島、韓国、秀吉の出兵ですね、長崎にいるんなものが、日本と異なった銅や真鍮とか着物など、略奪品がたくさん運ばれてきた。この町つまり長崎のある店に、非常に大きい8パルモの紙の本が何冊かあって、それを自分が買った、と。商売人だから、これは売れると考えたんですね。

このころ私は5人の朝鮮人の娘を、ここは日本語訳は下女となっているんですけども、

原文はミスエスクラボスと書いてあります。ですから本人としては奴隷だと断言していません、この5人の娘たちを奴隷として使っていた。その中の3人は日本語がよくでき、彼女たちを呼ぶと、二人は笑って互いに顔を見合わせて、マリアという名の一番小さい子を呼び、三人でそれらの画の意味について話してくれた、と。

これをみると、アビラ・ヒロンは、奴隷とは言いますが、わりあい親しさをもって、女の子たちの良さ、ちゃんと中国語や韓国語を読める、と。これを通して、やはり長崎にこういうような本が出回っている。彼が断言しているのは、この教えですね、キリスト教と同じようなものが回ってきたんだと。挿められている内容が私たちのと同じものだということですね。おそらく景教ですね、景教関係のものが中国から韓国に入って、その大きな本を秀吉の兵士たちが略奪品として持ってきて、長崎で売っていた。

アビラ・ヒロンが書いた原文には宣教師たちのコメントが書き込んであって、アビラ・ヒロンはわかってないんだと書き込んでいます。だけど今読むと、いやアビラ・ヒロンの方がわかっていたんですけれども。そういう文化交流が行われていて、宗教、例えばすでに中国にはキリスト教が入っていたということ、真面目にとると、そっちのほうが発展していたということにもなります。奴隷という言葉はひどいと私たちは思いますが、逆に言うところの人たちのおかげでいろんな情報が伝わっていたということが出来ます。

画像として逸翁美術館蔵の岬の教会の南蛮屏風の岬の教会あたりを見ますと、キリスト教のことをあまり知らないで屏風を描いた人たちから見ても、印刷された本、いわゆるキリシタン版の本を持って教えて学ぶ、両方とも本を持っている様子がわかります。印刷が非常に大事だということが、絵を見ていてもわかるんですね。屏風で目立つのは賑わっているところですけども、端っこをよく見ると同じように本を持っています。もう一つ屏風で、盛んに品物を何かしている、この部分を拡大しますと、一生懸命に本を見ている、勉強しているんですね。中国語、当時の漢文、日本語といってもいいかもしれませんが、両方とも神父っぽいですね。難しい顔をして読んでいる、苦勞している、そんな風に解釈してもおかしくないと思います。この屏風は最近になってあちこち出てきていますが、イメージ的には岬の教会は、海に面して見晴らしがいい場所だったということですね。

以前の講演で前紹介しましたが、ローマ・ジェス教会の1619年長崎殉教図では、海の入りがあって、塀ですね、少し残っていたことが見てとれます。これは1619年の殉教ですから、当然ながら後で描かれたものですけども、その時はまだこの塀が残っていたんだと。牢屋に近いところですから、かなり地形的には正確に描ける範囲で、小さなところまで明確に出ているといってもいいかもしれません。

モンタヌスですね。これには日本語訳があります。1670年、だいぶ後になっての長崎の描写です。

モンタヌスの長崎描写（1670年英語版）

〔長崎の〕道は狭くて短い。それは 88 本を数え、同数の門（木戸）を数える。毎晩それぞれの門が灯りを持った屈強な警備員によって閉鎖され、代官の許可証がなければ、手当の必要な患者に向かう医者、出産しようとする婦人の助産婦、命に関わることであろうとも決してくぐれない。火事があったとしても他人からの助けを望んでも無用であり、自分たちの力で助けられなかったら、叫びや涙、大声の文句があろうとも…

長崎の道は狭くて短い、それが 88 本、そんなにあったかなあと、どう考えても 88 はなかった気がするんですけども。それに同数の門がある、と。モンタヌスの長崎描写を見ると、江戸の町と同じようにそれぞれの町が閉鎖され毎晩それぞれの門が灯りを持った屈強な警備員によって閉鎖され、代官の許可がなければ、手当の必要な患者に向かう医者、出産しようとする妊婦など、命にかかわることであろうともくぐれない、と書いています。火事があったとしても他人の助けを望んでも、無用であり、と。収容所という感じの描写になっている、これをこのままとれば、ですね。先の長崎の時代、盛んに貿易を営んでいた時代と比べたら、100 年近くたって、町の雰囲気がいぶ変わっているということですね。

1739 年と推定されている長崎近郷之図（細部）を見ると、内町の境に土塁が残っています。もちろん地図がどこまで正確かはあるけれども、意識して書いているのは間違いないです。これを見ると、88 本の道はどう見ても入らないですから、おそらく外町も含めて数えているんですね。

少し後の時代ですけども、「長崎の港と村落図」ペラン作 1764 年を見ると、要塞や、あるいは堀の形が出ていないんですね。もちろん書いた人は外国人で、長崎に来たことはなく、想像で描いたということにはなりますが、川がちゃんと描かれていて、出島など出ており、堀についても存在が見えるんですね。するとつまり要塞や堀の形はもう目立たなくなっていたと理解できます。

ところが、長崎、版画地図（1801 年）になると、また要塞の後としての石垣がちらちらと出ています。こちらは日本人が描いた、もっと地形をわかって描いていると思われます。すると、要塞の石垣は、部分的に残っていることになります。

最後にこの文化の面を少し紹介します。エヴォラ屏風内書状に、秀吉の右筆であった安威了佐シモンによる書状があります。この書状を見ると、時代がもう一度秀吉時代に戻りますけれども、秀吉の近くに熱心なクリスチャンがいて、秀吉の幹部、いろんな人たちの動きを詳細に、宣教師に伝えていた、ということになります。

Pedro Gomez, COMPENDIUM, コレジオの「講義要綱」（日本語、モードリン本）を見ると、長崎のコレジオにあった、今でいえば大学レベルの教科書ですね、を見ると、日本語で縦書きにしてある、ということはコレジオで日本語も使われていた、ということですね。当

時の京都でも江戸でもこのような外国の神学校で日本語で教えられる所は長崎にしかなかったですから、そういう意味では長崎はこういう文化の中心だったと言っても大げさではないです。それと、文化交流の一つのハイライトは、これは何回も出た話ですから飛ばしませんが、やはり天正少年使節があります。長崎から出て長崎に戻って、全国に、ヨーロッパにも大きな影響を与えた。ヨーロッパではあちこちに彼らが残したものがあります。また伊東マンショ感謝状（シクスト五世教皇宛）、1587年12月10日を見ると、教皇宛てでスペイン語の手紙ですが、私から見てもまったく申し分のない書き方です。もちろん相手が教皇ですから宣教師たちが直したに違いないんですけども。それにしても、当時の日本人の何人かは世界、この場合は教皇、に宛てて手紙を交わしていたということです。

殉教記録ですね。長崎、あるいは全国に行われていた殉教を詳細に伝えていたのは、やはり長崎の本部にいた人たちであったということです。

これはヴァリニャーノ神父が自分の兄弟アンドレア・ヴァリニャーノに書いた手紙です。1598年の長崎発です、秀吉の動きを紹介しています。このような手紙が15年ほど前に発見されて、彼が親戚に送って、その親戚が持っていたということです。今でも話題になるようなところが、長崎の動きだったんですね。

少し社会とか、時期を動かしていきますけど、セバスチャン・ヴィレイラが長崎開港についていろいろな思い出を書いています。

[キリシタンたちは]殉教したマグダレナ林田たち、有馬出身七人の遺骨をとってカルヴァリオ管区長に渡した。[その後]セルケイラ司教が主式した荘厳な行列をもって、我が会員たちが埋葬されている[本部の]墓地、十字架の麓に葬った。この偉大な宝によって、この家[修道院]が豊になり、これらの贈物を通して神様からの大きな恵みが期待できる。

彼らキリシタンたちが、殉教したマグダレナ林田、これは有馬の殉教者の分派なんですけれども、有馬出身の七人の遺骨を持ってカルヴァリオ管区長に渡したんですね。そのあとはセルケイラ司教に渡して、本部にあったこの墓地、十字架のふもとに葬ったということです。当時のイエズス会本部は、本部機能だけではなく、墓地があつて、修道院内ですね、何人かそこに収まって殉教者ということで宝物として扱われたということです。

1620年代、墓地あるいは本部を破壊されるときは報告になるんですけども、長谷川権六が、生きている人たちを迫害したのち死者をも迫害したと、長崎の3つの墓地、すなわちミゼリ・コルディアや今の法務省の所、聖十字架のサンタ・マリア、今の博物館の所に遺体を掘り起こして長崎市街にあるサン・ミゲル、今の諏訪神社の近くに移るように命じたということです。

権六は生きている人を迫害した後、死者をも迫害し始めた。この町[長崎]の3墓地、

すなわち、ミゼリ・コルディア、聖十字架とサンタ・マリアにあった遺体を掘りおこして、長崎市外にあるサン・ミゲル墓地に移すように命じた。何日もの間、町のいたるところで泣き声と涙が続いた。キリシタン達は当地の習慣に従って置かれていた墓碑や十字架を自らの手で外した。その中に〔私達は〕、イエズス会員と共にミゼリ・コルディアに葬られていた司教ドン・ルイス〔セルケイラ〕を移した。

役人たちが来て墓を全部壊したのではなくて、キリシタンにやるように命じたわけです。すると、大事に丁寧に動かしたでしょう。その一つをセルケイラがマカオに送ったということもわかるんですね。大事にしたからこれがセルケイラの遺骨だとわかったし、送れる。役人たちが来て全部を破壊すれば、そうはならない、確認できるはずがないですから。そういう意味では今日の発掘で、何か残している可能性もあるということです、これは5、6年前にも同じことを言いましたけれども。

いわゆるキリシタン版について、表をお見せします。

和漢朗詠集	日本語	国字	1600	
おらしよの翻譯	日本語	国字	1600	長崎
どちりな・きりしたん	日本語	国字	1600	長崎
金言集	ラテン語	ローマ字	1603	
日葡辞書	日本語・ポルトガル語	ローマ字	1603-4	長崎
日本文典	日本語・ポルトガル語	ローマ字	1604-8	長崎
サクラメント提要	ラテン語（日本語）	ローマ字	1605	長崎
スピリツアル修業	日本語	ローマ字	1607	長崎
聖教精華	ラテン語	ローマ字	1610	長崎
こんてむつす・むん地	日本語	国字	1610	京都
ひですの經	日本語（ラテン語・ポルトガル語）	国字	1611	長崎
サルペ・レジイナ，十戒他断簡	日本語	国字		
祈祷文断簡	日本語	国字		
「どちりいな・きりしたん」	日本語	国字		
「ばうちずもの授けやう」	日本語	国字		
太平記拔書	日本語	国字		

長崎だけではないですが、いわゆるキリシタン版がどこで出版されたかという点、ほとんど長崎です。日本における長崎の文化上の位置を示しています。

あと少し紹介します。『ぎやどペかどる』1599年、(フランス国会図書館)「言葉の和らげ」は、漢字に、ひらがな、送り仮名を書いて、読み方を記しています。当時のキリシタンたちは、当時の日本人に読めない専門用語のような漢字を、他の漢字といっしょに並べています。ある意味で、キリシタンの文化といえるものが栄えていたと、ヨーロッパの文化でもない、

日本の伝統的文化でもない、新しい文化の形がこの長崎にできあがっていったと見ることができます。いろいろな観点、いろいろな側面から見て、そういうことになると思います。

一つの表れとして、ミゼリ・コルディアの人たちによる1602年のイエズス会総長宛ての伝書です。

キリシタン七人連署

(ポルトガル語、日本の花押)

「神様のより多い栄光のためとこのキリシタン共同体の誉れのために、聖なる貴下の祈りと犠牲の際にこの我が組を思い起こして下さるようお願いいたします。

長崎，1602年3月10日。」

このように長崎のミゼリ・コルディアの商人が願っているんだということですね。

もう一つ文化関係です。今で言えば百科事典みたいなものです、これがやはり宣教師たちの動きによって、内容は横文字なんですけども、用例が出ているんですね、つまりどう使うかですね。

Miuchi.[身内] Interior dos pacos, ou casas de pe[çoas nobres. ○[用例] Item aliquando, a [enbora da ca [a, ou molber dalgum [enbor.

そうすると、言葉一つの意味だけでなく、どう訳せばいいかに止まらず、この場合はこのように訳すということがわかるように心がけている。学問的だったと言ってもよいかもしれせん。

あとは教会内の動きになりますけれども『サカラメンタ提要』長崎1605、ですね。これもセルケイラが長崎で出版させた本です。典礼書ですけども、やはりこれも同じように、長崎、というか日本のキリシタンたちに合わせて、ヨーロッパになかったような、お盆での死者のお祝いとか、日本のお正月に合わせて、お守りのサンタ・マリアを決めたり。

あとは『スピリツアル修業』、長崎、1607年出版1869年のプチシャン司教手書き、長崎大司教区蔵ですね、長崎で出されたということが明確に書いてあります。

少し飛ばしますけれども1619年に出されている追放令、イエズス会ジョージ書簡（長崎発1619年10月25日，JSin34,190），宣教師たちはもう出て行って、いないはずなんですけれども、書簡から少し拾えるんですね。また中浦ジュリアンが1633年に殉教した時には、中浦ジュリアン殉教証言（マカオ，1633年，Madrid，BRAH. Jes. 22）が発信されています。

ルイス・バス・ピントの証言

イエズス会員中浦ジュリアン神父について、尋ねられて、答えた。

忍耐強く殉教するところを自分の目で目撃したこと、暗い穴に足より吊されたこと、殉教する前にたびたび裁判に連行され、あらゆる財産、自由などの約束を受けたにも関わらず信仰のために命を捧げたことは公に知れわたっている。

自分はその殉教が行われたときにその場とその時に立ち会ったことを証言する。

ルイス・バス・ピントは、商人です、彼が長崎で立ち会って、ジュリアンが殉教した、立派に最期を迎えた、と証言しています。長崎で行われていたことの情報は、世界に渡っています。

だいぶ時代が変わりますが、1685年ですね、Fr. Noel to the Duchess of Aveiro は大金持ちだったんですけども、彼女が結局日本あるいは東アジアのミッション、宣教師たちを支えるんですけども、1685年に手紙を出した。そこに「この街（マカオ）に日本からの船が嵐によって遭難し、乗っていた12人が助けられた」と書いてあります。そして、12人を帰すという名目でもう一度ポルトガル船を出そうとしています。向こう側の資料なんですけれども、1685年です。1か月あとぐらいに船が行って、長崎で、この人たちを帰しに来ましたから入れてくださいという内容です。大騒ぎになるんですね。全部紹介することはできないんですが、面白い事に、最後までやはり長崎の代官にしか問い合わせないんですね。ポルトガル人側からすると不満だけれども、当時の長崎は、仕切るのはこちらだということで、江戸に伺う必要はないと言わんばかりの動きが面白い。これは日本語訳があるので、興味がある人はどうぞ。かなり長い文章なんですけれども、やり取りが延々とあって。結果としてうまくいかなかった。

同じ1685年の9月ですね、マカオに漂着した日本船の船材で作った木箱1685年9月23日、マカオに漂着した船が解体され、乗組員12人と船具は長崎に送還した。箱には雲仙地獄と水責め拷問火刑による殉教のイメージが画かれています。これは、26 聖人記念館に展示されている物です。遭難した船の箱、いろいろな破片、板を取ってつくり、日本で行われていたいろいろな拷問のことが書かれていて、長崎には入れないという、悩みというか嘆きが込められていると思います。

以上、違った分野からの話をさせてもらいました。時代がちょっと飛んだりして、わかりにくかったかもしれませんが、発表としては以上です。あとは質問などがあればお願いしたいと思います。

結論として、今まで話したことなんですけれども、やはりこのマカオと同じようにポルトガル領土扱いされていた長崎の時代もあって、追放令後、秀吉が宣教師たちにみんな出ろという命令、バテレン追放令を出すんですけども、結局長崎はバテレン追放令以降に駆け込み寺的な役割を果たしていました。それで、結果と状況を見たローマの本部からの指示が背景にあって、暴力や威嚇対策から受容と妥協に変更したということです。つまりヴァリニャーノたちが最初にやっていたようなことは自殺行為になるという判断になる。簡略に言うとそういうことになったんですね。そのような時代の変化のなかで、長崎は日本の顔になった、その顔の一つとしてイエズス会本部があったと言えます。

長崎とイエズス会本部の役割

1. 開港初期はマカオなどの「ポルトガル領域扱い」された。(1570～1587)
2. 追放令後(1587)長崎はキリシタンの「駆け込み寺」

3. 結果と状況を見たローマ本部により、方針が「暴力や威嚇」対策から受容と妥協に変更された。(1590 前後)
4. 激動中でも遣欧にとっては長崎が「日本の顔」イエズス会本部が「長崎の顔」だった。(殉教の影響)
5. 港らしく「船」の動きが重要な役割を果たした。
 - ・ サン・フェリペ号と二十六聖人
 - ・ マドレ・デ・デウス号と迫害、禁教令
 - ・ オランダ船と出島、ルビノ使節団の殉教。遭難した船への対応

最後に少しだけ紹介します。この辺の資料や研究はたくさんあります。やはり港らしく船の動きがいろいろな役割を、ほとんどの大きな出来事は船が関わるんですね。例えばサン・フェリペ号、あるいはマドレ・デ・デウス、そしてバテレン追放、徳川政権とキリシタンたち、ポルトガル、スペイン系のキリシタンたちとの対立。先ほど紹介したように、遭難した船もその動きに使おうとしたと思います。港だからこそ、外との関係でアイデンティティを保ち続けてきたと言えるのではないかと思います。

ありがとうございました。

上 菌：まことにありがとうございました。とても面白かったです。

レンゾ神父：ありがとうございます。

上 菌：最初に私の方から一つ質問させていただいて、感想を述べさせていただいて、皆さんに質問していただこうと思います。質問というのは、ドゥカッドという単位ですが、いろんな研究者がどれぐらいの価値なのか、なかなかわからないんですね。

レンゾ神父：そうですね。

上 菌：それを石（こく）というふうに計算していらっしゃいますが、ポルトガルから船がやってきて一日にまとめて港に入るお金を払ったと。それが 700 石というふうに考えると、大なる額になると思うんですけども、ドゥカッドを石と換算していいというのは、何か根拠があるのでしょうか。

レンゾ神父：宣教師たちの資料の中に何人か、石がドゥカッドに一致すると書いてあるんですね。本人たちはどこまでが正確かとか、例えばフランシスコ会の資料を探してみましたけれども、やはり修道院を救ってもらったんだというとき、500 ドゥカッドかかったんだと。500 石を大名が出して、修道院全体に行き渡るといって、だから膨大なお金と言いましょうか。ただ、ポルトガル人にとって米で渡されても困るから、そういう意味ではどう換算するかによってだいぶ違うでしょうね。

上 菌：もう少し続けさせてください。最初、イエズス会が修道院を守るために大砲とか鉄砲で武装して、川とか堀を作った。最初にこの話を聞いたときは、昔発見した時には、驚いたんですけども、後から武装しないと方針を変えたのは、日本国内の動きに対応した結

果かなと思ったんです。つまり、戦国時代だと武装しなければわが身を守れない。しかし、秀吉とかが全国を統一すると、逆につぶされるということだったのかなと考えたのですけれども。つまり日本の状況に対応したと理解したのですけれども、今回のお話を覗くと、逆に世界全体からの方針によってイエズス会が武装というやり方を切り替えた。武装はキリスト者としての本来の生き方ではない、と圧力としてかけられた、本来のキリスト者としての生き方に立ち返ろう、武装もしない商売もしないという風にもっていった。それは、キリスト者とは何か、どういう形で人と関わるのか葛藤があったのかな、という印象を受けました。

関わってもう一つが、奴隷に着目しておられて、その人たちをどうするのかを国際的に見通す目を持っていたところから、本来どうあるべきかに議論が行った、そういう側面があったのかなと推察しますが、いかがでしょうか。

レンゾ神父：そうですね、私も正直言って、日本国内だけの事情ならば、迫害とか、戦国時代は大名に許してもらえばそれですむんですが、秀吉よりは徳川政権になるとそういうわけにいかない、それは注目していたと思うんですよ、私もあるいは今までのキリシタン関係の研究者ですけれども。ただ、当時の動きですよ、ここに南米のことは今敢えて触れなかったんですけれども、南米も同じように奴隷問題とか現地のインディオたちの扱い方とかですね、もう限界に来たということですね。一つの結論が、結局商売するんだったら、当時の商売品として、残念ながら人も売ったり買ったりしていた。奴隷制度は公には禁じられていたんでしょうけども、結果としては行われていた。だから商売を全面的に切らない限りは、人身売買は切れないという面があった。世界の動きから見ると、それが決め手だったと思います。ヴァリニャーノたちはその辺りは、認めざるを得なかったでしょうし、このままでいけば自分たちもつぶされると気づいていたでしょうね。高山右近とかそういった人たちから。今回は触れなかったけど、クエリオとかカブラルとか、宣教師たちは武力を使うべきだという立場をフェリペ 2 世にも当時の総長にも出していたんです。ですからそれを見て逆に怖くなったということですね。

西村：西村です。長崎も雪で、ウェブ講演は、時代に即した講演会ではなかったかと思えます。できたら神父さんにお会いしたかったのですが、お話を聞いて大変参考になりました。一つ教えてほしいんですが、要塞を作ったということですが、作った主体、例えば途中書いてあるのが、戦争が続いて海の泥棒が多かったのも、彼らは危険にさらされて、その町の人々はドン・バルトロメの命令ということをつくったと。その町の人々ということで、町の人々が維持した感じでしょうけれども、要塞化された都市づくりが最初どういったところで組織的に考えられたのか、教えていただきたいと思えます。あとイエズス会の話なんですけれども、長崎を治めるときに神父さん方とイエズス会の組織といろいろあって、この中によく「われわれ」と書いてありますけれども、統治する主体も、流れが少しずつ変わっているのかなと思うんですが、そういう組織的な変化と、また要塞を作る

に至ってどういったところで、組織的に命令があったのかを教えてください。

レンゾ神父：最初はマカオとかマニラとか、ああいう所で、つまりポルトガル人たちにとって周りはどういう文化かもわからないし、また攻められる、追い出されるということで、商売が安定できるような拠点をつくる習慣があったんですね。その意味では長崎は最後にできた、流れとしては自由に、つまりはオランダ人に圧迫されないでほとんど自由につくることができた、南米もそうですけれども、そういう流れですね。長崎はつくったものの、事情があまりにも変わったんです。つまり彼らは、最初は、大村純忠という大名が許可して土地を譲ってくれて、これは安定して商売ができる、全国の大名たちあるいは商人たちがここにきて商売する見通しがあった。途中で結局、秀吉が没収するんですね。だから法律とは関係なしにやはり軍事力によって成り立たなくなったということになる。つまり安全で、安定して商売するような場所ではなくなってしまった。そういう意味での変化は、国内の変化と外国の変化ですね。今回紹介したのはローマでの動きです。日本だけの変化であれば、当時例えば加津佐の集まりなど現地で決めればいいんですけれども、現地で決められなくなる、現地で決めていいものではなくなってしまった、あまりにも影響が大きかった、そういうことですね。長崎の膨大な成長あるいは爆発的な成長、人もどんどん増えて、ポルトガル人、長崎の住民、その上に捕虜ですね、秀吉の出兵によって連れてこられた人が先の資料で見ても、何千人という人が来ていたから、当然ながら街がどんどん増えるし、その人たちは食べなければならない、人に仕事を与えなければならない。土塁とかあるいは要塞を作るのは、奴隷に近い扱いをされていた人たちですね。現代ではとんでもない話なんですけれども、当時はそのような現実であったと言える。

今回、われわれと書いてあるのはイエズス会士の情報だから、管区長、あるいは責任者は総長に書いているんですから当然ながら会の人たちのことを指しています。本来だったらドミニコ会とかフランシスコ会とか、あるいは、今日は一回だけですねアビラ・ヒロン、商人たちの情報網を総合的に入れてみないといけないんですけれども、一時間ちょっとの発表では無理ですから、今回はあえてイエズス会の情報に絞って話しました。ですから、「われわれ」と言っている部分はイエズス会員だと訳してもおかしくないです。だけど、当然ながらイエズス会だけではないんですね、他の要素もたくさんあったんですね。

福田：今日はどうもありがとうございました。東京に移られてから、なかなかレンゾ神父のお話を直接お聞きする機会もなかったもので、貴重な時間をいただきましてありがとうございました。お尋ねしますのは、イエズス会が1590年ぐらいを境に適応主義に変わってきたというお話しでしたけれども、当時1590年代にフランシスコが長崎に来てから、スペイン系の方々は日本に対する宣教の方針はその後どのように変わっていったのでしょうか。やはりイエズス会と同じように適応主義に変わっていったのか、原則的なもので最後の1614年の禁教を迎えたのでしょうか。その辺のところをお聞きしたいです。よろし

くお願いいたします。

レンゾ神父：適応主義的なところは最初からザビエルの頃から変わっていない、とさっき敢えて言いましたが、宗教的なものではない。つまり教会の都合というよりは商売や軍事、そっちの動きがだいぶ変わりましたという内容なんですね。ですから、宣教の仕方、キリスト教を伝えるための方法は、イエズス会は最初から安定していたんですね。ただ、出版物を日本語で出版するためとか、日本人がラテン語やポルトガル語を使いこなす教育は、天正少年使節団が戻ってきてはじめてですが、やり方としては最初からこうする予定だったんですね。ただし、周りの事情があまりにも変わったから、それにどう適応するかというところなんですね。そうすると、方針としてはイエズス会のやり方と、例えばフランシスコ会とかドミニコ会のやり方が違っていたということは事実です。ですから、宗教だけの対立ならもっと解決しやすいんです。例えば司教が決めた時には、この暦を使うということですね。イエズス会とフランシスコ会がもめていたんですね、このころ。どれに基準を合わせるかということですね。ただ、説明したように、宗教的なこと以外の、軍事的あるいは政治的な事がからんでくるから、余計に複雑になったんです。本来は、教えの内容としては同じキリスト教、同じカトリックですから、それが無いはずだけれども、やはり長崎でいえば村山等安というような、かなりの実業家でもあるし、クリスチャンになって、商売にうまい人、国際的ないろいろなことができる。だだ彼がイエズス会につく、またはドミニコ会、フランシスコ会につくことによって、二つのグループが対立したり、等安についての評価を見ると、イエズス会側の資料とドミニコ会側の資料では、まったく違うんですね。悪者と救い主みたいな分かれ方。教えに対しての問題じゃなくて、現場での対応、土地、関わっていた秀吉、寺沢奉行の動き、その辺は大村純忠の時代から関わっていた人たちは当然ながらイエズス会に寛容だったりとか、彼等は、多少無理があっても許していた。ただ、フランシスコ会、ドミニコ会にとっては、差別だ、なんでイエズス会だけが特別なんだと。例えばイエズス会が一番いい土地をもらったりとかですね、当然そうなる。で、それに関わる信者たちも、互いの対立、互いの考え方やり方が変わってくる。本当に複雑な、一言では言えないような、時代だった。なかなかまとめてこうだと言いきれないですね。

福田：先程のお話の中で、利益を目的に商売をしてはならないというお話がございました。

当初長崎とか日本に来た時に、プロクラドールですか、企業を介して日本の商人とポルトガル商人との間の仲介を神父たちがしていたと思うんですけども、時代が変わるにしたがって、それも止めるようになったんでしょうか。その辺のところをお聞かせください。

レンゾ神父：プロクラドールといっても、区別しないといけないのは、修道院の中での経済、食べ物とか土地とか維持費などお金が動くんですから、当然ながらそれを計算してまた注文したりとか、そういう人がいたんですね。ただ長崎の最初の頃に紹介したのは、その人はある意味では財務大臣であるかのような役割、つまり長崎の修道会と本来ならば会

計を分けないといけないんですけども、本人たちは分けたつもりでも、結果としてはイエズス会の修道士達が長崎の経営を仕切っていた。彼らによって、船とか税金とかいろんなことが決まってしまうていた。当時の商人たちにとって、仲介者であるこの会員がいなかったら、もっと儲けるのにとすることに、そのうちなるんですね。その意味では乱用というか、行き過ぎがあったのは事実です。ですから、その意味では本来の形に戻したということですよ。

修道会内では当然ながら食べていけないといけないし、教会があると信者たちが来て集まる場所を拡大するとか、必要なものは確保して、寄付をもらったりもあります。問題になったのは、それ以上儲けて財産を蓄えてやっていた。それを修道者がやっていいのか、武器とかを確保するというのは、何やってるんだと、たぶんヨーロッパの人たちもびっくりしたでしょうね、報告されて。ローマの人たちから、これはだめだという話になった、ということですね。

細井：細井です。どうもお久しぶりです。今日は大変勉強になりました。ありがとうございました。質問でもいろいろ大変勉強になりました。ちょっと本質から外れるかもしれないんですけども。朝鮮人女性の奴隷の話が出てきました。アビラ・ヒロン。ここに出てくる「自分らの教えとあなた方の教え」という所で、「自分らの国で崇めている聖人たちの本」というのは、儒教ですかね？

レンゾ神父：これはもちろんだろうという本だったかはわかりませんが、この時代、秀吉の出兵の時に向こうから持ってこられた本ということは、中国語、当時は韓国でも中国語を使っていますから、結局これはそういう風にしか考えられない。モリホン神父は、だからこれはありえないとチェックを手書きで書いているんですけども。おそらく景教とかでしょう。フランシスコ会は8世紀あたりに中国に行っているんですね。その時に立派な本を寄贈して、それが残って、写本が作られたとか、いろんな想像はできるんですけども。私が言いたかったのは、アビラ・ヒロンの描写を見ると、敢えて嘘をつく意味はないから、これをありえないと片付けるよりは、そういう事実があって、長崎に、漢文でキリスト教の版画などがきれいに押された本があったのだらうと思うんですね。

レンゾ神父：断定はできませんが、描写から見ると、アビラ・ヒロンは熱心なクリスチャンであって、儒教を知っているわけじゃないし、この時代はマテオ・リッチの出版物はまだ出ていないですからね、秀吉の時代にはまだ。後の1600年代になればそうですけどね。だから、時代から見ると、別な系統で入ったものだ、と。だから、モリホンはアビラ・ヒロンの書いたものをでたらめだと片付けてしまう、しかしおそらくそうじゃないと思うんですね。

西村：すいません、西村ですけど。その時の貿易の話ですけども。イエズス会の組織の中での貿易なんんですけども、おそらく銀とか銅とか、アジア内、遠くてゴアまでだったの

じゃないのか、アジア圏内だと思うんですけども。大砲とかいったら、ヨーロッパから来たのかなと思うんですけども、輸入輸出の流れはどんな風な形だったんでしょうか。それとイエズス会の関与という意味で、イエズス会の管理できるところでの貿易という形だったのか、教えていただければと思います。

レンゾ神父：最初は、大村純忠の領土に住んでキリシタンになってキリスト教を広めていいというところは、世界どこの国でも行われていた宣教です。しかし、やっぱり長崎と茂木を譲ってもらう、譲ってしまうということは、外国の領土を日本で作ってしまうことになってしまったんですね、解釈としては。そういう風になったんですね。ですから、宣教師たちは自分たちの責任だ、宣教のためにはこれは役に立つんだと、ちょっと拡大解釈というんでしょうか、そうだったと思うんですね。もちろん大砲とか武器は外国から持ってくるんですね。毎年船が持ってきて日本で高く売っていた。最初、戦国時代の時には武器を買ったり売ったり、金属を買ったり絹を買ったり、当時としては珍しい品物を、今でいえば独占禁止法に引っかかるんですけども、まとめて押さえて、あとは自分の好きな値段で売りさばくという、とんでもない商売だった。彼らにとってポルトガル船とのつながりがあるから、当たり前だと思っていたかもしれませんが、内容から見るとかなりはみ出していたことが、先の資料でもわかるようなところですね。

フロイスは最初は 200 人、300 人のフェリペ王の兵士で長崎を守ればいいんじゃないかと言いましたが、じゃあ連れてきたその人たちの生活とか言葉とか文化ですね、どうすればいいんですか、と。そう考えると、とんでもないところまで話が広がっていったということです。現地の人たちにとってみれば、必要だからやりましようと言ったかもしれませんが、外から見ると、危険な線を越えていたということですね。

岩崎：私は大学院生の時にキリシタンの研究をしまして、ヴァリニャーノが熊本の人吉の相良氏に確か書状を送っているんですね。イエズス会としては当時、九州の中でキリシタン大名でない大名たちとどのように交流、付き合っていたのかが気になっていて、もし何かご存じでしたら教えていただけないでしょうか。

レンゾ神父：わかりました。キリシタン大名でない人が大部分ですね、つまり彼らは日本を宣教地として見ているから、ザビエルが来てからまだ 50 年前後しかたっていない時代ですから、当然ながら彼らは異教徒と呼んで、キリシタンでない人が大部分ですね。逆に言うと、キリシタンになった大名に対しての扱いが特別になったということになります。その人たちは味方でもある、スポンサーでもある、相談相手でもあるんですね。また、言葉、文化を教えてもらえる人たちになる。ですから、そっちのほう、キリシタン大名のほうに近かった。すると、さっきの問題ですね。戦争があるから支えてください、武器を船で取り寄せてくださいと宣教師たちに頼むということになる。最初これを、今日紹介した資料だけを見ても、宣教師たちはキリシタンだから支えたほうがいいと解釈したんですけども。結果として、あまりにも宗教に、政治、軍事がからんでしまうと、どっちがどっちか

わからなくなる。まあ戦争に負けたらアウト、信仰生活もできなくなるということですね。その事態が、キリスト教が日本である程度まで拡大した後で見えてきたことになるかなと思います。ですから、キリシタンでない大名が場合によって信長とか秀吉とかの大名というか当時大物というか日本を仕切るような人に対して、日本にいられるように人質という表現で使っているんですけども、この資料では残ったんだということですけども、現実を見ると残されたというか、この人たちを残さないと責任を取れる人はいないんだと。おそらくその時代だと住人はもう殉教者になるつもりで長崎に残って、ほかの人たちは天草などのキリシタン大名が支えてくれるところに、少なくとも迫害がないところに移動することになるんですね。だからその動きは確かに、サポーターとかスポンサーがいるかないかによって、振り回されていたということでしょうね。

岩崎：ありがとうございました。

椎名：今日は熊本にいながら長崎の講演を、しかも東京におられるレンゾ神父のお話を聴けるということで。ある意味非常に便利です。質問なんですけど、私ちょうど年末にヴァリニャーノの長崎認識について、スペイン語で何と呼んでいるか、つまりどの程度の都市として認識していたか考えました。すると、長崎が、要塞とか、貿易も、ポルトガル船とか来航して栄えている、しかし、栄えていることは認めながらも、港というだけで、日本語の語感の都市という表現を使おうとしない。後の時代、その後の人たちはわりと気楽に使うというか、広く使っている印象をもっております。ヴァリニャーノが特別に都市とよぶ言葉の表現に厳しくて、ハードルが高くて、それ以外の人はずもなかったのか、あるいは他の人たちは、町があつて要塞があつて、気楽に読んでいたのか、長崎が発展していくに従って、皆さんが都市と呼ぶようになったのか。ヴァリニャーノが特別だったのか、あるいは時代が進んでいって呼ばれるようになったのか。ヴァリニャーノの個性なのか、判断しにくかったのでそこを教えていただければ幸いです。

レンゾ神父：わかりました、ありがとうございます。宣教師たちが狙っていたのは、やはり京都なんですよ。やっぱり都が中心だと。ザビエルもわざわざ天皇陛下に会おうと思ったけど、門前払いだった。宣教師達から見ると、長崎よりは京都、博多とか堺とか、イメージとしてはそこを拠点にしたかった。豊後もそうですけど。彼らがイメージしているパリとかローマとかいうようなことから考えますと、長崎は小さな便利な港として開発していこうというイメージだったんですね。ただし、さっき言ったようにどんどん商売も増えるし、人も増えるし、迫害されたら皆が長崎に行けば何とかなるということになって、結果としては長崎がキリスト教の日本の中心となって今に至っていると言っていいかもしれません。政治的には幕府が動いて江戸が中心になってから、長崎はそんなに港として大事な貿易が、じゃあ例えば秀吉たちから考えますと、家光、秀忠の時代に長崎がどこまで重要かと言ったら、貿易さえあればいいといった形なんですよ。ですから、宣教師たちの感覚はそうだったと思うんですよ。ですから、コスメ・デ・トーレスみたいなかえって

一般の庶民が教会の中心になるような考えとかですね、あるいはアルメイダとかそういう人のほうが、長崎に対して見ると、もっと愛情をもってというか大事だということですね。他のところは、結果は長崎が貿易や文化に中心的な役割を果たしたといっても、九州なんですよ、彼らは当時の人たちの呼び方に合わせてそんなに文化の拠点というようなことを思っていなかった表現は多いんです、確かに。

椎名：私が *sumario* を読んだところだと、*sumario* の中に入るのは、ヴァリニャーノは、西から博多、府内、山口、堺、京都、安土、政治的な地域ですね。ヴァリニャーノが長崎の住民に対して言っているのは、ノーブルじゃないと、ヴァリニャーノは貴族ですから。ヴァリニャーノのノーブルじゃないという言い方は、長崎認識として結構大きかったのかなという気がいたします。

レンゾ神父：やっぱりヨーロッパ中心主義なんですよ。例えば南米、私は南米出身なんですけれども、南米はもっと蔑んで馬鹿にしていた。でもそれはあくまでヴァリニャーノたちの偏見ですよ、ノーブルネス、家柄があって、お城を持っているとか、家来はどれぐらいいるとか、あれはあの時代の感覚でしょうね。だから逆に言うとそれが、奴隷問題とかにもつながるんですよ。つまり、ああいう人たちは奴隷にしているという議論があったぐらいですから。今だったらとんでもない恥ずかしい話ですけども。やはりあの時代の感覚を考えますと、そうなるでしょうね。

椎名：ありがとうございました。

上藪：最後にレンゾ神父に一言お願いいただいて終わりにしたいと思います。レンゾ神父どうぞよろしくお願いいたします。

レンゾ神父：はい。十分に話しましたので、感想として。今回は敢えて本部の役割というものを考えるときに、マイナス的な部分も含めて、注目されていなかった部分を敢えて取り入れました。先ほど話したように、いろんなことが絡んでいて、一面だけを切り取るやり方は難しいですね。奴隷問題、これだけでも一つの発表をしないといけないと思うんですけども、とにかくそういう分野も関わっていたということは、これまでの研究ではほとんど出ていないから、奴隷も含めて考えていって、例えば社会正義関係の研究者とか、いろいろと研究していただければ幸いです。私たちは当然ながら、宣教関係、神学あるいは文化的なところに目が行きやすい、関心が高いんですけども、それに貿易なども絡んできています。そういったことを無視するよりは、どんどん取り上げて、長崎の歴史、また役割を浮き彫りにしていく、するとますますやることが多いですね。いろんな分野・研究的な発掘もまだまだたくさんあると思います。

上藪：ありがとうございます。長崎はそもそも国際的な都市として始まったということはわれわれ誇りに思っている、そういう長崎をもう少し世に出していきたい、発展させていきたいと思っています。反面、国際的であったということが、奴隷問題を含めて政治的な問

題を含めて、いろんな問題を抱えながら動いていた、ということ、レンゾ神父に率直にお話しいただいた。われわれが長崎を考える際に、どう掘り下げていくか方向を考える大きな礎石をつくっていただいたと思いました。どうもありがとうございました。

レンゾ神父：どうもありがとうございました。皆様お疲れさまでした。